



剃り上げた顔

FERDINANDO FREGA · GILLETTENARRATIVE · GILLETTEVATICANO · 03/17

世界のあらゆる権力は何かを求める。一票を。購入を。署名を。忠誠を。利益を。愛でさえ、いったん組織の中に入れば、遅かれ早かれ請求書を突きつける。

それから、交換の論理を逃れる異例の力が存在する。無償で与えること。世界で最も古い力であり、同時に最も理解されていない力だ。

イエスは始まりではなかった。だが言葉の言語を使い、それを自力で歩ける語りに変えた最初の者だった。軍隊を築かなかった。銀行を設立しなかった。神殿を開かなかった。領土を征服しなかった。物語を創った。

そして物語が語り手より長く生き延びるほど強くなるとき、権力が即座に見分けるものが生まれる。影響力だ。そのとき利害が生まれた。彼を愛する利害ではない。彼を理解する利害ではない。彼と戦わずに彼を操縦する利害だ。

語り手として、私が思い描くのはこの光景だ。衣をまとった男。背が高い。美しい。長い髪。きれいに髭を剃っている。騒がしい群衆のなかを歩き、声を張り上げることなく、それでも語ることができる。

彼は全員に向かって話さない。一人ひとりに話す。

少ない言葉。正しい言葉。命じない言葉。開く言葉。沈黙よりも遠くまで届く言葉。

こうして預言者は生まれる。誰かが彼を宣言するときではない。人々が彼のことを他人に語りはじめるときだ。

だが神殿の男たちは、何かが変わりつつあることに気づいた。参拝の数が落ちていた。好奇心が移りつつあった。注目も同じだった。そして注目を制する者が権力を制する。

そこで彼らは彼を宮殿に召喚した。表向きは彼が何者かを知るために。実際には彼をどう止めるかを知るために。

彼はファリサイ派の長衣を着ていなかった。ターバンを巻いていなかった。権威の記章を帯びていなかった。その時代の支配的なフォーマットを示す長い髭も生やしていなかった。

尋問のなかで彼らは彼を境界の内側に連れ戻そうとした。彼に区分を割り当てようと。彼にラベルを見つけようと。彼を、すでに知っているものの劣った版に変えようと。だが彼はすり抜けつづけた。

そして何よりも一つの答えが、矢のように時を貫いて来るように思える。なぜあなたは私の目の中のおが屑を見て、自分の目の中の丸太を気にかけないのか。

言及されていたのは髭だった。あらゆる権力は、自分の矛盾をもはや守りきれなくなったとき、相手の細部を吟味するからだ。

彼はその方式で、人々に新しい可能性を教えていた。フォーマットの外で生きること。体制に反対するのではない。その外で。

そのほうがはるかに危険だ。体制は敵に対しては身を守る術を知っている。だが、ただ自分たちの規則に従うのをやめただけの人間を理解するのには苦勞する。

それから政治がその道筋をたどった。いつもそうだ。対等な条件で戦って彼を破れないとわかると、世界で最も古い武器を使った。減算だ。取り去ること。減らすこと。単純にすること。すでに決まった選択の前に大衆を立たせること。

広場での取引は、よくできた作戦がいつも到着するのと同じやり方で到着した。民主主義を装って。髭のないイエスか、髭のあるバラバか。自由か、フォーマットか。予測不可能性か、帰属か。

勝負は簡単だった。フォーマットが勝った。ほとんどいつもそうであるように。

だが敗北のまさにその瞬間に、無償で与えることがその本性を現した。伝統的な権力は反応する。無償で与えることは理解する。そして彼は、いかなる組織も、いかなる政府も、いかなるアルゴリズムもいまだ完全には説明できない一文で答えた。彼らを赦してください、彼らはまだ自分が何をしているのか知らないのです。

それは正当化ではなかった。診断だった。

残りは弟子たちがやった。彼らは一冊の本を書いた。

あるいはもっと稀なことを。彼らは千年紀を生き延びられる語りを書いた。あらゆる言語に翻訳され。あらゆる文化に横断され。あらゆる宗教に解釈され。異議を唱えられ、愛され、歪められ、書き直され、擁護され、攻撃された。それでもまだここにある。

どの企業部門も、その流通に並ぶことはできなかった。どの広告レイアウトも、その持続に。どのロゴも、その識別性に。製品は市場を旅する。語りは人を旅するからだ。

この光景に冒瀆はない。あるのは語る絶対的な権利だけだ。彼らの市場の外を、独立して、煩わされずに動く権利。同意しない者は、自分により合うフォーマットを読める別の本を探す自由がある。

結局のところ、これがイエスの力だ。力の権力ではない。金の権力ではない。統治の権力ではない。無償で与える力。語り手が去ったあとも巡りつづける唯一の力。

Ferdinando